

模擬講義を活用したリクルーティング：中国、ベトナム、タイにおける「名大巡講」の実施

国際教育交流センター教育交流部門

伊 東 章 子

1. これまでの経緯と計画

平成26年度より教育交流部門では模擬講義によるリクルーティング、名大巡講を実施している。名大巡講は本学の教員が協定校を訪問して模擬講義を提供することで、本学の教育・研究を紹介し、また大学院への進学意欲を高めることで、大学院リクルーティングを強化しようとする試みである。講義に合わせて進学説明会を実施し、本学の留学情報も発信している。平成26年度はインドネシアと中国で開催し、インドネシアで190名以上、中国では約400名もの参加を集めた（詳細については『名古屋大学国際教育交流センター紀要第2号』教育交流部門・部門報告を参照）。講義終了後に参加学生の多くが日本留学や名古屋大学に強い関心を持ってくれたことから、名大巡講が本学大学院や各種短期プログラムのリクルーティング手段として効果的であると考えた。また協定校関係者の間でも名大巡講に対する評価は高く、積極的に受入れを申し出てくれる大学も多くなってきている。そのため留学生の受け入れ拡大を目指して平成27年度も継続して名大巡講を実施することとなった。

訪問地には前年度も訪問した中国に加えて、ベトナム、タイを選定した。名大巡講は講義に足を運んでくれた学生に対するリクルーティング活動であるばかりではなく、協定校との人的交流の促進や、ひいては実施国における本学のブランド力強化という多岐にわたる戦略性を併せ持つ。名大巡講にかけられる費用と人的資源は限られているため、海外事務所とともに協定校各校との関係性を考慮しながら訪問校を検討した。まず中国での訪問校には吉林大学、東北大学、華中科技大学を選定した。吉林大学と東北大学では前年度も名大巡講を実施したが、中国交流センターを通じて今年度も開催してほしいとの要請があった。継続して実施することで、両校での本学のプレゼンスが定着で

きると考えた。一方の華中科技大学は過去には文系、理系分野に偏りなく本学大学院へ多くの留学生が来ていたが、直近5年間は進学実績がほとんどない。模擬講義の実施を通じて本学への関心を掘り起こすとともに、本学卒業生で現在華中科技大学教員となっている者と、同大学から日本への留学事情について意見交換も行うことを目的とした。

ベトナムに関しては、日本では2014年以降ベトナム人留学生が急増している。JASSOの外国人留学生在籍調査によると、平成27年5月1日付のベトナム人留学生の数は前年度比91.6%増だった。今後もこの傾向が続くと予想されることから、本学もベトナムでのリクルーティングにより一層力を入れるべき時期に来ていると考えた。本学のベトナムにおける全学期協定校はベトナム国家大学ハノイとハノイ工科大学の2校であるが、2校とも学生の受入れ実績は非常に少ない。今回はベトナム国家大学外国語大学、ベトナム国家大学人文社会科学大学、ハノイ工科大学で模擬講義および本学の説明会を開催し、本学の認知度を高めるとともに、本学の多様な留学プログラムを紹介するようになった。また渡日ベトナム人留学生の数が増加している一方で、その多くの進学先が現状では日本語学校となっている。そのため今後どのくらいの層の学生が日本で大学院に進学するか、見極めが必要な点もある。模擬講義の実施と合わせて協定校関係者と日本留学への送り出しについてのヒアリング調査も並行して行うこととなった。

タイの模擬講義は本学バンコク事務所の協力を得て実施した。タイは本学の国際戦略上の重要地とされ、これまで様々な試みがなされてきたが、残念ながら留学生数の増加に結び付いていないとの指摘が学内にある。チュラロンコン大学およびカセサート大学の人文、工学部、理学部と様々な部局で模擬講義を実施することで、多様な層の学生に本学への関心を高めて

もらうこととなった。

2. 中国における活動報告

【実施スケジュール】

11月16日：吉林大学，11月17日：東北大学，11月19日：
華中科技大学

【講義担当者】

国際教育交流センター教育交流部門

伊東章子（国際言語文化研究科），曾剛（工学研究科），
西山聖久（同），ミッシェル・キューン（情報科学研究科）

1) 吉林大学における活動の概要

【文系講義】会場：吉林大学外国語学院

伊東「鉄道網の発達と日本の近代化」

キューン「源氏物語と愛知県：なぜ国宝源氏物語絵巻は徳川美術館にあるのか」

進学説明会

文系講義は外国語学院日本語学科主催の講演会として開催された。会場には同学科の学部生，大学院生，教員のおよそ160名が集まった。昨年は学部3年生および大学院生からの参加であったが，前回の講義が好評だったために，今回はこの日に行われる同学科の授業を全てこの講義に振り替えたとのことだった。吉林大学日本語学科の学生の日本語能力は非常に高く，入学間もない1年生でも日本語による講義内容を理解しようと真剣に耳を傾けていた。また同学科は日本語学のみではなく，広く日本研究として歴史分野や文学分野にも力を入れたカリキュラムを展開している。そのため今回の技術史及び古典文学という講義内容についても，学生からは積極的な質問が寄せられた。

講義後の進学説明会では，本学の短期留学プログラムに関する質問が多く出た。吉林大学からは本年2月から始まったNUSTEP（名古屋大学短期日本語プログラム）への応募者が突出して多く，今回の講義にもNUSTEP参加予定者が5名出席していた。彼らの話によると，以前より関心のある名古屋大学にまずは短期プログラムで留学し，その後大学院の進学先として検討したいとのことだった。前年度に吉林大学を訪問した際の日本語学科教員とのヒアリング調査において

も，同学科の学生の間で各種短期プログラムの参加者が全学生の4割近くにまで達していること，さらに日本の大学院へ進学する学生の多くが短期プログラムの留学先にその後進学していることが明らかになっている。大学院リクルーティングという長期的な目的のためにも，本学は短期プログラムの開発に力を入れるべきであると言える。

【理系講義】会場：吉林大学国際連携与交流処

西山，‘Introduction to the Theory of Inventive Problem Solving for Engineering Students’

曾，‘Embedded Computing Systems for Energy Conservation’

進学説明会

理系講義は特定の部局によるのではなく，吉林大学国際連携と国際交流処主催の学術講演会として開催された。講義には理工系を中心として，講義テーマに関心を持つ学生が全学から100名以上集まった。吉林大学では本学同様，自動車工学に特化したプログラムがあるため，今回の講義テーマに関心を持った学生が多かったようである。各講義後の質疑応答でも，テーマに関連して踏み込んだ議論が行われた。また質疑応答の様子から，参加学生の英語能力は総じて高いと感じられた。

前年の吉林大学での名大巡講の際には講義の内容に関心を持って参加したものの，必ずしも日本もしくは本学への留学に関心があるわけではない学生が目立っていた。しかし今回の講義後の進学説明会では，日本留学を希望する学生から具体的な質問が多数寄せられた。中には留学エージェントに誤った情報を伝えられ，その真偽を確かめようとする学生もいた（聞いたところによると，かなり高額な仲介手数料を支払っていた）。また文系講義同様に，NUSTEPに参加予定の学生も出席していた。さらに今回の進学説明会では新たな試みとして，CSC「中国国家建設高水平大学公派研究生項目」による留学の紹介に力を入れた。ちょうど講義の実施時期が11月でCSCの応募時期と近いこともあり，参加者の反応はとてよく，早速応募手続きなどに関する質問もあった。今後CSC学生の受け入れを増やすためには，本学協定校に対して本学から情報発信を行うことが不可欠だろう。

2) 東北大学における活動の概要

【文系講義】会場：国際連携与交流処
伊東，キューン，進学説明会

東北大学における名大巡講は東北大学国際連携与交流処主催の学術講演会として、文系、理系合同で計4時間にわたって開催された。会場付近には同処が作成した大きなポスターまで設置されており、東北大学における本学の認知度を高めるために非常に効果的であると感じた。東北大学国際処の日本担当である魏氏は本学との交流にとっても積極的である。講義においても自ら司会を行い、本学の説明や講師の紹介などをしてくれた。先方にこのような本学との交流に意欲的な担当者があると、お互いにアイデアを出し合い、様々な試みを通じた関係構築が図りやすい。

文系講義には外国語学院日本語学科の学生を中心に全学から60名が参加した。日本語学科の日本史の授業をこちらの講義に振り替えて、学生を引率してきてくれた教員もいた。また専攻は日本語ではないものの、独学で日本語を勉強している学生も複数名参加していた。いずれも日本人による専門分野の講義を聞くのは貴重な体験の様で、講義の内容について熱心にメモを取っている姿が何人も見受けられた。講義終了後の質疑応答において、参加教員から東北大学国際交流担当者に対して「せっかく日本から専門の研究者を招くのであれば、学生が講義内容をきちんと理解できるように、学内で事前学習の機会を設けて欲しい」という要望が寄せられた。名大巡講を通常授業と振り替えてくれるケースも多くあるので、今後は講義資料の事前配布や文献の紹介などを行い、講義を単発イベントで終わらせない努力をしていきたい。

【理系講義】会場：同上
曾，西山，進学説明会

理系講義の時間帯には理工系を中心に全学から約50名の学生および教員が集まった。前回より参加者が少なかったが、これについては魏氏より前日までテスト期間だった学院が多かったことが理由に挙げられていた(昨年度は情報学院が受け入れ部局となり90名の学生が参加)。学生は非常に積極的に講義に参加していた。前回も同じ感想を持ったが、東北大学生の英語運用能力は高く、講師からの問いかけなどに対する反応も良

い。可能であるならば、同大学の学生とは複数回にわたる課題設定型のワークショップなどを行うのにも挑戦してみたい。

進学説明会では全体の質問時間にはなく、個別に相談に来るケースが目立った。大学院やポストドクに関する照会だと、どうしても個別の相談にならざるをえない。今回は参加学生の多くが関心を持つ工学研究科と情報科学研究科から3名の留学生担当教員が揃っていたので、部局についての詳細な質問にも十分に時間をかけた対応が可能だった。

3) 華中科技大学における活動の概要

華中科技大学は中国国家教育部が直轄する重点大学の一つである。とくにIT、数学分野の評価が高い。2016THE アジア大学ランキングでは94位に入っている。また2016年度の中国校友会網による大学ランキングでは13位に位置している(ちなみに吉林大学は同ランキングで11位、東北大学は26位である)。既に冒頭でも触れたが、過去には華中科技大学で学部を終えた学生の本学大学院へ進学実績がほぼ毎年あった。また本学で博士号を取得した留学生が、修了後に華中科技大学で教員になったこともあった。しかし過去5年間は受け入れ実績が途絶えつつある。また中国交流センターが把握している限りでは、本学と華中科技大学の間で目立った交流実績もなかった。そのため華中科技大学との交流を復活させることを目的にへ名大巡講の開催を申し出ることにした。

【文系講義】会場：華中科技大学外国語学院
伊東，進学説明会

文系講義は日本語学科の歴史の授業の一つとして開催された。当初は華中科技大学国際交流処が主催する全学講演会の形で行うことで計画が進んでいたが、国際交流処日本担当者から全学向け講演会では使用言語が英語か中国語に限定され、日本語での講義はできないとの連絡が入った。そのため急遽本学国際言語文化研究科の卒業生・王閏梅先生が学科長を務める日本語学科に講義の受け入れを依頼したところ、快諾してもらえた。交流が活発ではない協定校と新たなことに挑戦するのは容易なことではない。ぜひ名大巡講の開催を機に、関係復活を図りたい。

講義には学部3年生、4年生と歴史を専門にする教

員約50名が集まった。華中科技大学日本語学科の規模は一学年40名である。講義に参加した学生は全員N1を取得済みで、講義の質疑応答も日本語で大変スムーズに進んだ。華中科技大学では伊東のみが講義を行い時間的な余裕があったこと、また事前に日本語学科と打ち合わせが可能だったこともあり、講義中の随所に設問を挟むインタラクティブな講義形式を取った。どの学生も真剣に与えられた設問に答えようとしていたし、中には日本の近代史について豊富な知識を持ち合わせた学生もいた。

進学説明会では本学の短期プログラムに関する質問があがった。華中科技大学からはNUSTEPへの参加者が2名おり、その二人ともが講義に参加していた。話を聞いたところ、自分の指導教員である王先生から名古屋大学のことをかねてより聞いていて、ぜひNUSTEPに参加したいと思ったようである。やはり留学先の選定については実際にその大学で学んだ卒業生の影響力は非常に大きい。それが自分が指導を受ける教員であればなおさらである。余談となるが、王先生からはヒアリング調査の際に、名古屋大学同窓会の武漢支部を作りたいという申し出があった。このように母校に思い入れを持ってくれる卒業生がいることは大変頼もしい。

【理系講義】 会場：華中科技大学自動化学院
會，西山，進学説明会

理系講義は本学工学研究科で客員研究員の経験のある自動化学院黄劍教授が準備を引き受けてくれた。会場には同学院の学生40人ほどが集まった。必ずしも講演テーマに直接的に関係のある分野の学生ばかりではなかったが、それでも講義に対する学生の反応はよく、ディスカッションでは多くの意見が述べられていた。残念ながら参加学生の間で本学への知名度はさほど高くなく、また日本への留学を検討している者もほとんどいなかった。少なくとも5年前までは華中科技大学から本学大学院へ進学する学生が毎年出ていたことを考えると、これは憂慮すべき状態である。最近の世界的な留学動向の変化、もっと言えば欧米の大学院へ進学を希望する中国人学生の急増という事態に、残念ながら本学の対応が後手々々になってしまっているのではないだろうか。実際に華中科技大学の学生や教員と交流する機会を持ち、本学のプレゼンスを回復する努

力が早急に必要だと感じた。

一方で、ここでも進学説明会でCSCについて取り上げたところ、後日講義に参加した学生からメールにて応募手続きについての問い合わせがあった。その学生は結局応募までに至らなかったようであるが、少なくとも名大巡講への参加を機会に、本学留学を検討したのは事実である。ほんの少しではあるが、今後の華中科技大学への働きかけに手応えを感じた。

3. ベトナムにおける活動報告

【実施スケジュール】

3月15日：ハノイ工科大学（理系講義のみ）、ベトナム国家大学外国語大学（文系講義のみ）、ベトナム国家大学人文社会科学大学（文系講義のみ）

【講義担当者】

国際教育交流センター教育交流部門

伊東章子（国際言語文化研究科）、エマニュエル・レレイト（工学研究科）、石橋和紀（理学研究科）

1) ハノイ工科大学での活動の概要

ハノイ工科大学はベトナムにおける理工系トップの国立大学である。ベトナムの国立大学の中でも特に政府からの重点的な予算配分を受け、大学の国際化を急速に進めている。本学とハノイ工科大学とは、2009年に全学間協定を締結している。これまで本学旧グリーンモビリティ連携センター（以下GREMO）が、ハノイ工科大学、タイ・チュラロンコン大学とともにJSPS拠点形成事業に採択されるなど、研究交流は着実に成果をあげている。しかし学生交換については、これまでに同じくGREMOとの共同研究の関係で学生交流が若干あるくらいで、ハノイ工科大学から本学への進学実績は少数に留まっている。

ハノイ工科大学での模擬講義を計画するにあたっては、実質的に本学とハノイ工科大学との交流窓口となっているGREMOに協力を依頼した。また現地での連絡調整などは本学CALEベトナムハノイ事務所の支援を受けた。

【講義】 会場：ハノイ工科大学理学研究科物理学科
レレイト ‘Inventive Problem Solving Approach to Disaster Risk Reduction’

石橋 'Physics Made Easy: Stellar Physics as an Example'

ハノイ工科大学での講義には学生約30名、教員約10名が参加した。物理学専攻の学生が多かったので、防災工学の講義(レレイト)も本学が開発した ChubuSat 衛星の防災への活用など、物理学専攻に関連する内容へと組み替えた。二つの講義とも実験的にインタラクティブなスタイルで行ってみたものの、残念ながら学生からの反応は乏しかった。これには、ディスカッションできるほどの英語力がない、普段から授業で自由に発言することに慣れていない、さらにそもそも物理学分野の学生が本学の求めているレベルに達していないなどいくつかの要因が考えられた。学生の実践的な語学力や学力レベルは、実際に現地へ赴き学生と交流を持たなければ判断するのは難しい。名大巡講の場を活用して、各国や各協定校の「学生像」についての情報も蓄積していきたい。

一方で、少数ではあるが講義の内容を理解し、積極的に質問を行う学生も見受けられた。近年ベトナムからの日本への留学生が急増しているが、本学としてはただやみくもにベトナムからの留学生の受け入れを考えるよりも、このような一部の優秀な学生にアプローチする道筋を検討すべきだろう。

2) ベトナム国家大学社会科学大学および外国語大学での活動の概要

ベトナム国家大学ハノイは国立大学群であり、その組織下には人文社会科学大学と外国語大学を含む6大学を擁している。国家大学は現在ベトナムに2大学(ハノイとホーチミン)にしかなく、両大学群とも国家リーダーの養成を担うベトナムでトップの高度教育機関だと位置づけられている。本学とは2012年に国立大学群としてのベトナム国家大学と全学間協定が締結されているものの、これまで NUPACE を含めて学生の受け入れ実績は全くない。今回外国語大学と人文社会科学大学で模擬講義を実施するにあたっては、本学ベトナム CALE の日本語担当教員らに協力を依頼し、受け入れ要請をしてもらった。

【講義】会場:ベトナム国家大学人文社会科学大学日本研究学科, 外国語大学日本語学科
伊東「鉄道網の発達と日本の近代化」

ベトナム国家大学人文社会科学大学では日本研究学科の2年生の近代史の授業として講義を行った。その時間帯に授業のない学生も交じって約40名の学生と教員が集まってくれた。参加者は主に2年生ということで、講義が始まる前は日本語の理解力に不安があったが、どの学生も集中力を切らさずに最後まで講義内容に耳を傾けてくれていた。講義にはグループで考えて、日本語で答えさせる課題をいくつか織り交ぜたが、参加学生たちは積極的に意見を出し合いながら話し合っていた。

日本研究学科は後述する日本語学科とは異なり、地域研究としての日本研究を行っているために、日本語教育よりも日本に関する総合的なスペシャリストの養成に力を入れているという。本学の文系部局では基本的に日本語能力試験N1を取得済みであることを大学院への留学条件に課している。しかし現実問題、中韓台の3か国以外の学生が学部在籍中にN1を取得するのは非常に困難である。人文社会科学大学の例は、このように語学力で「足切り」を行ってしまうと、総合的な学力があり、また意欲的な学生を取りこぼしてしまう危険性があることを示しているだろう。今後東南アジア地域から留学生を獲得するためには、語学力と他の学力のバランスをどう判断するかについて慎重な議論が必要になるだろう。

外国語大学では日本語学科の3年生約30名を対象に講義を行った。日本語学科長によると卒業までにN2取得レベルの日本語能力を養成するようカリキュラムが組まれているという(これは前年に訪問したインドネシアの諸大学でも同じ目標設定だった)。参加者は3年生ということもあり、日本語での講義内容も十分理解している様子で真剣に耳を傾けてくれていた。講義終了後の進学説明会で尋ねてみたところ、参加者のうち半数弱が名古屋大学の名前を知らないかと答えていた。これまで外国語大学とは研究交流も学生交流も実績がないので、知名度が低くても無理はない。名大巡講などの開催を通じて、まずは名古屋大学の名前を覚えてもらう努力から始める必要がある。

4. タイにおける活動報告

【実施スケジュール】

3月17日:チュラロンコン大学, 3月18日:カセサート大学

【講義担当者】

ベトナムと同じ

1) チュラロンコン大学での活動報告

チュラロンコン大学は言わずと知れたタイのトップ大学である。本学が参加している AC21のメンバー校でもあり、また本学バンコク事務所もキャンパス内に設置していることから、非常に緊密な関係を築く協定校である。しかしこれまでの多方面にわたる関係強化に関わらず、同大学からの学生の受け入れ数は増えていない。このため今回人文学、工学、理学と幅広い分野の模擬講義を提供し、同大学の学生と直接交流する機会を設けることにした。

【文系講義】会場:チュラロンコン大学文学部東洋言語学科 (伊東)

講義には日本語講座の大学院生と教員が約20名集まった。タイでは学部で日本語を学んだ成績優秀者が卒業後に国内の大学で日本語講師として就職するケースが多い。チュラロンコン大学大学院東洋言語学科は、そのような既に日本語教育に従事している教員の、いわゆるリカレント教育の受け皿になっている。実際に講義にも他大学で教える傍らチュラロンコン大学で学ぶ大学院生が多く参加していた。残念ながら本来名大巡講がターゲットとする学生層とは異なっていたが、講義後の進学説明会では参加者から本学の留学について多くの質問が寄せられた。やはり今後教員としてプロモーションを果たすためには修士号や博士号が不可欠であり、できれば日本への留学経験も積みたいというのが共通の声だった。大学院リクルーティングとなると学部生ばかりに目を向けがちだが、既に教職についている者も留学に強い関心を持っていることが分かった。

【理系講義】会場:チュラロンコン大学理学部 (石橋)、工学部 (レレイト)

理学部での講義には物理学専攻の学生と教員を中心に50名程度が参加した。その内の約10名は、たまたまチュラロンコン大学キャンパスで開催されていた国際天文学オリンピックの強化宿泊に参加していた中高生だった。中学生から教員まで幅広いレベルの参加者

が揃う結果となったが、講義は大変な盛り上がりを見せた。参加者全員が物理学もしくは天文学を専門にしていたこと、さらには学生全体のレベルが高かったことから、インタラクティブな講義形式が十二分に通用した。さらに質疑応答でも熱心に質問が飛び交う結果となった。中高生を含めて学生の英語力も総じて高く、物理分野の教育水準が非常に高い印象を受けた。

工学部での講義には土木工学学科の教員および学生、約40名が参加した。防災は土木工学と密接なつながりのある分野であることから、参加者は講義内容に非常に強い関心を持っていた。実際に予定していた質疑応答の時間をオーバーしてもなお、フロアからは講義内容についての質問が相次いだ。また講義終了後の進学説明会においては「自分も日本で防災や減災について研究をしてみたい」、「名古屋大学に留学して、防災研究で博士号を取得したい」と真剣に訴える学生も現れ、進学について積極的に質問する姿が見られた。

2) カセサート大学での活動報告

カセサート大学もチュラロンコン大学とともに AC21のメンバー校である。もともとは農科大学として設立されたが、現在はタイでトップクラスの総合大学になっている。本学バンコク事務所を通じてカセサート大学に名大巡講の受け入れを要請したところ、すぐに歓迎する旨の回答が得られた。また講義の当日には国際担当理事がわざわざ挨拶に見え、カセサート大学国際部が本学との交流に非常に意欲的であるとの印象を受けた。

【文系講義】会場:カセサート大学人文学部東洋言語学科 (伊東)

講義は同学科日本語講座で行われた。会場にはその時間に授業のない学生が1年生から4年生まで合わせて50名ほど集まった。講義直前に同講座の教員から学生の間で日本語能力に開きがあること、1、2年生はまだ日本語による授業を経験していないことが伝えられた。海外の協定校で日本語による講義を行っていると、このように日本語能力が不足する学生は往々にして現れる。それに対応できるように、PPTに画像を多用し日本語能力が乏しくても飽きの来ない構成にしたり、また誰でも答えやすいクイズを途中何度も挟むことで注意を引き付けたりと、参加学生のレベルに合

わせて臨機応変に対応する準備が必要である。模擬講義はリクルーティングの目的で実施しているので、学生に知的に講義を楽しんでもらえるかが何より重要である。もし講義をつまらないと感じてしまえば、その学生にとって名古屋大学はつまらない大学だと思われる可能性が高い。

講義終了後の進学説明会では NUSTEP についての質問が集中した。まずは短期で日本に留学してみたいという学生が多かった。また既に日本の大学に交換留学の経験のある学生からは、大学院進学についての質問が寄せられた。

【理系講義】カセサート大学理学部(石橋), 工学部(レイト)

理学部での講義には物理と化学を専攻する学生が約50名参加した。宇宙物理を学ぶ学生がいなかったこともあり、インタラクティブな講義形式に対する反応は鈍かった。この点については講義のトピックについて、参加学生が関心を持つ分野などを含めて先方ともっと事前に話し合いを持つべきだったと考えた。しかし質疑応答の時間には、一生懸命に質問をしようとする学生もおり、知識を吸収することの意欲の高さがうかがえた。講義の前に行われたラボ見学においても、教授に言われて実験するだけではなく、自分で考えつつ研究を進めようとする姿が見られたことから、講義内容がマッチすれば、もっと積極的な学生の姿が見られるのではないかと推測した。

工学部の講義は土木工学学科創立50周年記念講演会として開催された。会場には同学科の学生、教員、卒業生などが50数名集まった。本学からの講義だけではなく、同学科長による基調講演や、タイの防災研究者による研究報告も行われた。タイはたびたび深刻な洪水被害に見舞われているため、この観点からの防災研究が活発化している。そのため今回の講義には非常に高い関心が集まったようだった。講義終了後にはカセサート大学の参加者から本学と途上国における防災技術について共同研究を始めたいという提案があった。この共同研究をもとにカセサート大学から本学への学生の派遣などが活発化することが期待できる。

5. 今後のリクルーティングに向けた提案

最後に中国、ベトナム、タイでの活動を踏まえ、今後の大学院リクルーティングに向けた提案をまとめた。

1) 中国で訪問した吉林大学、東北大学、華中科技大学の日本語学科において、サマープログラムなどの比較的短期間の留学プログラムへの参加経験者が全学生の4割近くにも上っていた。しかも各校ともに特定の大学をパートナーとしてテラー型の短期プログラムを作り、まとまった人数の学生を毎年送り出している。残念ながら本学では NUSTEP がようやく始まったばかりで、まだまだ短期間に留学生を受け入れるルートが確立されているとはいえない。今回訪問したいずれの大学からも、短期プログラムの受け入れの検討要請があった。現行の NUSTEP のように、本学の全協定校から広く参加者を募るプログラム運営も学生の多様性の確保という点では大きな意義があるが、それと同時に長期的に友好関係を築けるパートナーを選定し、本学大学院へ進学しようとする優秀な学生を囲い込むことを目的とした短期プログラム作りも必要だろう。

2) 同じく中国の協定校で実施した進学説明会では、大学院入試方法に関する質問が多く寄せられた一方で、研究生に関する照会はほとんどなかった。世界中の多くの大学が、受験者が本国にしながら大学院を受験できる体制を整えていることを考えれば、本学のようにキャンパスに来なければ受験ができない入試方法は、国際的な留学需要から遅れていると言わざるを得ない。既に中国では「まずは研究生として来日する」という従来の留学モデルが通用しなくなってきていることを今回改めて実感した。平成27年度より教育交流部門では「研究生制度・大学院入試改革 WG」を設置し、大学院直接入試(渡日前入学許可)の全学的な実施に向けた議論を始めた。実現には部局の協力が必要であり、解決しなければならない問題も多いが、今後も直接入試の導入実現のための学内議論を牽引していくつもりである。

3) 上述したように、今回の中国における名大巡講から進学説明会において CSC の募集について細やかな

情報提供を行うことにした。それが功を奏したのか、昨年度の本学協定校からの CSC の応募者数が増加する結果となった。これまで中国での名大巡講は3月、11月と時期を定めずに実施してきたが、今後は CSC の応募時期に近い秋に実施できるよう検討している。

4) タイ・チュラロンコン大学東洋言語学科のケースが示すように、大学院リクルーティングでターゲットにすべきなのは学部生ばかりではなく、既に大学で働く教員も含まれるべきである。前年にインドネシアで模擬講義を実施した際にも同様の事例があったが、現在 ASEAN 諸国では大学改革が急速に進められていて、学士号しか持たない教員が海外の大学でより高位の学位を取得しようとする傾向が強まっている。今後東南アジア諸国からの留学生を増加させるためには、このような教員経験者の留学志願者に向けた入試条件の緩和などの受け入れ強化策を議論すべきである。

5) 今回中国、タイ、ベトナムにおいて模擬講義を実施したどの協定校にも、本学への留学に強い関心を示す学生がいた。進学説明会ではパンフレットなどを配布しながらできる限り細かな説明を行い、また場合に

よっては本学担当者の連絡先なども教えてはいるものの、それでも実際の出願に結びつくようなフォローとしてはまだまだ不十分だと言わざるを得ない。やはりリクルーティングを強化するだけでなく、リクルーティングによって本学に関心を持ってくれた学生が出願に至るまでをフォローするアドミッション支援が確立されなければ、留学生の受け入れ促進に結実することは難しいのではないだろうか。上述した「研究生制度・大学院入試改革 WG」では本学大学院への留学希望者に対するアドミッション支援の拡充策についても議論を行っている。一度本学に関心を持ってくれた学生が留学について気軽に相談できるワンストップ窓口を設置するなどの対策と、名大巡講を含めたリクルーティングの強化策とが両輪となって本学の留学生受入の拡大が達成されるはずである。ぜひこの点についても今後検討を続けたい。

*執筆にあたっては、工学研究科・會剛先生、同・レイト・エマニュエル先生、理学研究科・石橋和紀先生から貴重なご意見を頂戴した。どうもありがとうございました。